
妖精のケーキ屋さん

博麗まんじゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精のケーキ屋さん

【Nコード】

N2276W

【作者名】

博麗まんじゅう

【あらすじ】

貴方はとあるケーキ屋さんを知っていますか？隠れたようにひっそりとあるその店で焼かれたケーキはとても美味しいそうですよ。なんていったってケーキの精が手伝っているんですから。

簡単に書いたものなので、暇つぶし程度にでも読んでくれたら幸いです。

始まりの朝（前書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

ある程度目処がついたつぱいので、短編を書いてみることにしました。

べ、別に息抜きにやってたらいつの間にかできてたなんてことじゃないんだからね！！

始まりの朝

ケーキ屋の朝は早い。

材料の受け入れに、生地の仕込み、店中の掃除と済ませて、足りない材料のチェックに注文とくれば俺だって文句の一つや二つは言いたくなる。

店主である我が兄は未だにグースカと惰眠を貪っているのだろう。起きてくる気配が全くしない。どうせ起こしたら起こしたで「何で起こすんだよ!？」と理不尽に怒ってきそうだしな。俺としては働けクソニートと言ってやりたい。

ここは都心のとあるケーキ屋。別段有名なわけでは無い。どこにでもありそうなケーキ屋だ。ただ一つ違つとすれば……、

『おはよう、裕太』

精霊がいることだろうか？

精霊、物の怪とか妖怪とかに近いモノで科学じゃ解明できないファンタジーな存在。そんなものが見えるとすれば精神科医を薦めたところだ。

だが、残念ながら俺はその物の怪もどきが見えるらしい。くそ生意気な阿呆（妖精）を見た後に脳外科、精神科医その他諸々を回ってみたが、全て異常なし。全くの健康体だったことが空しくなってきた。

「ああ、おはようさん」

ひらひらと手を振り生地の仕込みに戻る。最近是不況のせいとかケーキを買っていく人は少ない。商品の種類も減らそうかと悩んだの

だが、この阿呆（妖精）が文句を言うので数を減らすだけに留まっている。ただでさえ家の家計は火の車だ、何とかして利益を出さなければ廃業すらあり得るのが怖い。

そもそもこの店は親父とお袋が建てた店だが、両親は昔交通事故で亡くなってしまったため、馬鹿兄が引き継いでいる。店主こそ愚兄になっているが、実質的オーナーは俺。材料の調達から接客まで全て俺がこなしている。

以前は高校にも通っていたが、馬鹿兄の店の経営の下手さに我慢ならず俺が店を引き受け、高校は止めてしまった。仕事が多いから、高校生活と一緒にするのは無理だった。

『晋は？』

眠そうに眼を擦りふよふよと近づいてくる妖精。名前はリリーというらしい。

リリーを見たとき、その存在にも驚いたのだが、その格好にもまた驚かされた。

容姿は普通に女子中学生の格好で、緑色のワンピースを着ている。背中には妖精を主張するように透き通った羽がある。そして極めつけはぼんやりと光を発していることだろうか。

「馬鹿兄ならまだ上で寝てるんじゃないの？」

ケツと吐き捨てるように言うと、『喧嘩はだめだよ』と騒ぎ出す。ああそうだ、妖精は五月蠅いのも特徴だな。

しばらく無視して作業を続けていると、みるみるうちに機嫌が急降下していった。さっきまで寝ぼけ眼だった目は半眼で、眉をつり上げる。

「ただでさえ忙しいのに上で暢気に寝てる馬鹿なんかかまってられ

るかよ」

『ふうん、そんなこと言うんだあ……』

目をつつと細めると、明らかに不機嫌な様子でツンとそっぽを向いた。

『いいもん、じゃあ私もお手伝いしないもんね』

口を尖らせて言う彼女の言葉に俺の身体がピシツと固まる。ギギギと油を差していない歯車のようにぎこちない動きで彼女を見る俺。彼女は俺が馬鹿兄と仲良くしない限り、どうあっても手伝わない意志を表示しているつもりか、ツンと不機嫌にそっぽを向いたままだ。

「……………頼む、それだけは勘弁してくれ。ただでさえ売り上げが少ないのにこれ以上下がったら困る……………」

頭を下げて頼み込むが、彼女の態度は変わらないまま。……………こちらが折れるしかないようだ。

「分かった。俺が悪かった。仲良くすればいいんだろ、仲良くすれば」

『それでよろしい』

ニコツと笑う妖精。愛玩動物を愛でる人なら確実に「お持ち帰りーっ!!」とか叫びそうな可愛らしいが馬鹿兄が言っていて俺にはさっぱり分からん、俺と馬鹿兄にしか見えてないので実際はよく知らない。馬鹿兄に言わせれば、「最高だねエ!!」らしい。

『で、今日も全部作るの?』

「ああ、作らなきゃお前文句言つだろ」
『もちろん!』

じゃあ言うなと言いつうになつたが、そこはぐつと堪える。機嫌を損ねて手伝いをしてもらえなかつたら大変だからな。

『いつ手伝いをすればいいの?』

「そつだな…、今日は生地焼き上げとデコレーションを頼む」
『任せました!』

作り終わった生地を型に流し込み、リリーに手渡す。不思議なことに体長が俺の親指ぐらいしかないリリーはバランスを崩すことなく生地を流し入れた型を持っている。リリーの七不思議の一つだが真相は教えてくれなかった。本人曰く、『妖精は秘密が多い方が素敵でしょ?』とのこと。お前しか妖精を見たことはないっつーの。

さて、俺が何故わざわざこんなわけの分からない妖精にケーキを作るのを手伝ってもらっているか説明しよう。

簡単に言ってしまうえば、リリーはケーキの精…、らしい。というのも本人から聞いてだけで本当かどうかは謎なのだが、悔しいことにケーキの出来は子供の頃からケーキを作る手伝いをしていた俺よりも上手かった。悔しくて涙がこぼれそうだったが、そこは男の意地で我慢した。

それ以来、リリーはケーキの精一（仮）としてうちを手伝ってもらっている。ずっと昔からこの店にいたらしいが、初めて見たのは2年前。不思議にまみれた謎の存在だと言わざるを得ない。

ケーキを焼き上げている間、俺はクリームを作ることにした。

この店で並べているのは、ショートケーキ、チーズケーキ、モンブラン、ザッハトルテ、ロールケーキぐらいだ。親父が店をしてい

た頃はもつとあったのだが、まだ修行中の俺にはそこまで出せる技量は持ち合わせていない。

自分の技量の未熟さにもやもやとした気持ちを抱きながらも俺はクリームをかき混ぜていった。

気付かぬキモチ

時間は昼過ぎ。

高校や中学では授業が終わり、生徒が下校する時間。

正直な話、うちの稼ぎのほとんどは高校生や中学生だ。下校の寄り道としてうちに寄るつてのが多いらしい。商品を増やしてくれとか注文も出ているのだが、生憎その予定はしばらく無い。

カランと軽快な音が鳴る。客が来た合図だ。

「いらつしゃい…って美保か」

「その言いぐさは無いんじゃないの、裕太」

営業スマイルからいつもの表情に戻す。ぶーぶーと文句たれていくがかまやしない。

彼女は桜井美保。俺の元クラスメイトであり幼なじみでもある。

そして、彼女は地味な俺と違って神から二物も三物も与えられた恵まれた人間だ。成績優秀、運動神経抜群、才色兼備、人間関係良好、と挙げればきりが無い。

そんな彼女が幼なじみだからという理由なだけでここを訪れている意図がさっぱり読めない。ケーキを買ってくれればそこそこの対応はするが、毎回冷やかに来る幼なじみに愛想を良くする理由など無い。

「冷やかしに来るお前に愛想振りまくなんざ余計な労力だつての」

「いちいち感に触る言い方ね…」

「そんなことしてると周りの人間が逃げちゃうぞ〜」と両手を口に当てメガホン代わりに言う美保。しかし俺はお構いなし。しばらく彼女も粘っていたが、あまりにも変わらない俺の態度に諦めたのかやれやれと首を振った。そして、珍しく 彼女にしては本当に珍しい ショーケースをのぞき込む。

「お前がケーキを選ぶなんて……………、明日は槍でも降るのか？」

「あんたって本当に失礼よね!？」

「祝い事ってのはないだろうからな……………」

「………… ハア、もう慣れたけどさ」

美保は諦めにも似たため息を零した。それからもう気にせずケーキ選びを再開する。俺もそれを何も言わずに見守る。伊達に幼なじみはやってない。引くタイミングはきちんと心得ているさ。

「それじゃ、このショートケーキ一個ちょうだい」

「へいよ、会計は250円だ」

「これをお願い」

「…………、ぴつたりだな。席で待ってる、後で持って行ってやるよ」

「はいはい」と答えながら彼女は空いている席に適当に腰掛けた。俺は彼女の選んだケーキを慎重にトレーに置いてある皿に載せる。

ケーキってのは味も重要だが、見た目も重要だ。もちろんそれはケーキに限った話じゃないんだが、ケーキはその中でも特に顕著だ。考えてみて欲しいのがぐちゃぐちゃになっているケーキを果たして食べたいかということだ。そんなものはいくら味が良くて誰か食べる気は起きないだろうし、味覚は視覚にもいくらか左右される。だからこそ、ケーキを運ぶときには細心の注意を払わねばならない。

床にトラップ 偶にリリーがいたずらと称して雑巾を転がして

いたり、水の入ったバケツを放置していたりする　　が無いことを
何度も確認しながら美保の席へと足を進める。

「ほらよ、お望みのもんだ」

「……こういう時ぐらい『お持ちしました』って言っても良いんじゃないのかしら？」

「ご希望にそえなくて申し訳ありません、お嬢様」

「いや、やっぱ止めなさい。鳥肌が立つわ」

失礼失礼と言うが、お前もかなり失礼な部類に入るからな。折角
希望に添ってやったというのに何だその言いくさは。

肝心の彼女はケーキを口に入れ、ん〜と満喫しているようだった。

「つたく。お前も大概…『カランカラン』いらっしやいませえ〜」

たちまち営業スマイルを浮かべる俺グツジョブ。

席では俺の変わり身の早さに美保は若干引いていた。ほっとけ、
このぐらい出来なきや営業なんてやってられないっつもの。

店内に入ってきた女子高校生達を席に案内して注文を受け取る。
受けた注文の品を取りに行こうと厨房に向かう途中であいつは二階
から降りてきた。

「おはよ〜、裕太。店は繁盛してるか〜？」

「誰かさんが働いてくれれば営業はもつと伸びるけどな」

寝ぼけ眼で未だ完全に覚醒してない兄貴、呉崎晋は「おはよ〜」
と働いているリリーに挨拶した後、テーブルに座っている女子高校
生の元へと歩いていく。その時に女子高校生達がキヤーキヤー騒い
でいたのはスルーする。

ぶつちやけここに来る女子高校生の半分ほどはあのアホ兄貴目当

てなので、今みたいに晋が店内にいてくれれば……、

『カランカラン』

「いらっしやいませ〜」

この通り店は繁盛する。だから阿呆には起きておいて欲しいのだが、如何せんあの常春頭は今の時間になるまで起きてこなかったりするのであまり当てにならない。俺がケーキの腕を上げるほかないということだ。

「……………」

ふと美保の方を見れば、ケーキを食べるのを止めて楽しそうに女子と談笑している晋のを見ていた。

……………？ 晋のことが気になるのだろうか？

弟の俺が言うのも凄くなんだが、晋は面だけは良い。いや、本当に。このまま一人で買い物行かせたら逆ナンかけられまくったらしくて帰ってきたのは夜遅くだった。

美保もそんな晋に惹かれた一人だったということなのだろうか？

ううん、美保も意外とミ〜ハーだな。

そんなアホなことを考えながら、注文を届けるためリリーにケーキを受け取りに行くのだった。

「おい、そろそろ閉店時間なんだが…」

「もうちょっとだけいさせてよ」

日は沈みかけ、閉店時間間際の店内。

店内にいる人間は片付けをするリリーとその手伝いの晋、あと床

を掃除している俺とテーブルで憂鬱そうな表情をしている美保だけになった。

今日の売り上げもまあ上々。アホ兄貴が途中から参戦してくれたのが効いたな。日頃の売り上げよりも今日の売り上げは少し伸びていた。この分なら新しいケーキを考えられるかもしれないな。

「で、お前はいつまでいるつもりだ？」

「もう……、晋さん！ この馬鹿に何か言っちゃってやってくださいー！！」

「裕太ー、女の子相手にそんなこと言っちゃいけないよー。美保ちゃんも遅くならない程度にいればいいからねー」

「ありがとうございます」

どうだと言わんばかりにフンと鼻を鳴らす美保。へいへい、わかりました。

サツサツと床を磨いていく。早々に床磨きを終わらせて今度はテーブルの方を拭き、席を整えていく。これを終わったらひとまずは仕事は終わりだ。

「ねえ……」

「ん？ なんだ？」

「あんたってさあ、もう復学したりしないんだよね？」

「はあっ……、またか。」

「前にも言ったと思うが、俺はもう高校に戻るつもりはない。もうこの店を継ぐって決めたからな」

「そう……」

彼女はふうつとため息を吐いて目を伏せた。

彼女は何故かは分からないがこうして度々復学しないのかと聞いてきた。だが、俺はこの店を継ぐと決めた以上は高校には行かないつもりだ。

でもそれで何故彼女があんな表情をするのかが分からん。女子っていうのはよく分からんものだ。

「あんたが……………」

「あん？ 何か言ったか？」

「何でもないわ」

はあ、さいですか。

それきり彼女は黙ったきり。俺も黙ったまま掃除を続けた。

数十分後、彼女は一言「帰る」と言っただけで帰って行った。

やけに気分が沈んでいた気がしたが……………気のせいかな？

わけの分からないことは考えないに限る、そう結論づけた俺は掃除を終わらせ、自室へと戻るのだった。

「さて、どうしたもんですかね」

机に開かれたノートには俺のアイデアが詰まっている。

ずっと作るうと思って試行錯誤してきた作品達である。もっとも、それが作られたことは一度たりとも無かったが。

「今の流行りとかも考えなきゃならないから……。まったく、困ったもんだ」

はあっとため息を吐いて俺は頭を悩ませる。

その後、考えすぎていつの間にか日をまたいでいたのは余談である。

傷ついた彼女、怒る俺

数日後の午後。

いつもに増して忙しい店内を俺は駆け回っていた。流石の阿呆兄も本気で客に対応していた。

つい先日、雑誌記者がここを取材しに来たのだ。当然、俺は忙しいので兄貴に任せたとこ、このありさまである。果たして何を言っただか。

そしてここ最近、ケーキを買わずとも必ずいる美保は店に来ていなかった。まあ、いても冷やかしをするようなやつは居てもらっても迷惑だが。

「リリー、モンブランとザッハトルテの追加できてるか!？」

「そこに置いてあるよう。それと休憩しちゃダメ?」

「もう少し頑張れ、ピークを過ぎれば休憩は取って良いから。あと次はショートケーキとロールケーキの追加頼む」

「ひーん!」

追加を頼んで出来上がったモンブランとザッハトルテのトレーをショートケースに持って行く。ショートケースに素早く並べ、注文の品を慎重に取り出し注文した客の元まで届ける。

忙しすぎて目が回りそうだ。

それでも仕事をサボるわけにはいかない。持てる力を総動員し、まるでラスボスに挑むかのごとき気迫を纏い、俺は仕事に取り組んだのだ。

リアルに目眩が起こるんじゃないかという忙しさのピークを過ぎ

て一休み。

店のドアに準備中という札をかけ、俺と兄貴はテーブルでぐでっ
ていた。ついでにリリーも『へにゃ〜』と変な声を出して机に突っ
伏していた。

「こ、これほど忙しくなるとは」

「ほんとだね〜」

『リリーはもうしばらく仕事したくないかも〜』

たしかにその意見には同調したいが、またしばらくしたら店は開
けなければならぬ。なんか仕事してて初めて今仕事したくないと
か思ってしまった。

三者三様に疲れている時、カランカランとドアのベルが鳴った。

「あ、もう閉店…ってなんだ、美保か」

「うん……………」

「……………?」

いつもなら「あんたってやつはね〜」とか言って突っかかってき
そうな彼女は今日はおとなしく、どこか憔悴したような感じだった。
おかしいと思っただ俺は彼女を席に座らせ、温かいお茶をテーブルに
置いた。

兄貴たちはいつの間にか姿を消している。逃げ足の速いというか
…。

「どうしたんだ、そんな顔して?」

「うん…………、いや…………。…………、実はね…………」

彼女は何度か躊躇った後、重い口を開くように一言一言呟いた。

「実はこの前頭木つて先輩から告白されちゃってさ……。別に好きでも何でも無かった人だったから断ったの…。そしたらその人の態度が激変してさ」

それから彼女は口を閉じ、目を伏せた。彼女は目尻に涙を溜め、つつと一筋それを流した。

「『こんなに俺が頼んでのに!!』って怒って…、それで乱暴されて…、危うく服を脱がされそうになった……。『裸を撮れば俺の言うことを聞くだろう?』って」

「ハアツ!?と耳を疑いそうになった。

俺が通っていた学校では美保はアイドルみたいなもんで憧れる男子達はそりゃ山ほどいると思うが、そんな野蛮なことをするような奴はいないと思っていたはずだった。

「その人はつい最近転入してきた人だったの……。それで……。私……。私……。!!」

大粒の涙を流し、声を抑えようとして失敗する美保。ついには大声を上げて泣き始めていた。

「怖かった…、怖かったよう……。!!怖くて…、怖くて…、身体が動かなかった…。!!もうダメだって…、そう思った…」

俺の胸に顔を押しつけ、彼女は泣いていた。

俺はいつもみたいに皮肉を言うわけでもなく、やれやれとため息を吐いて彼女の頭を撫でた。だが、表情にはおくびにも出さないが、内心は腸が煮えくりかえるような思いだった。

これは幼なじみとしての俺の怒り。俺の大切な人を泣かせ、その

上心にまで傷を付けようとした下衆への怒り。

「……………。美保、よく頑張ったな…。よく頑張った。だから…………。お前はずっと来なかったんだな」

「外に出たら…、あの人がいそうな気がして…………。ずっと家に籠もってた…」

「ずっとずっと我慢してたんだな…。もういい、もう休むんだ。どうせろくに寝てないんだろ？大丈夫、ぐっすりと寝れば悪い夢はもう終わるから」

「うん……………、うん……………！」

彼女は泣いたまま何度も頷いた。俺はずっと彼女の頭を撫でていた。

数分もすると彼女は眠りに落ちた。よっぽど疲れていたのだろう、無防備な顔で俺に寄りかかるようにして彼女は規則正しい寝息を立てていた。

「裕太……………」

「美保大丈夫？」

厨房からひよっこりと頭を覗かせる二人。さては、二人ともさっきの話を聞いてやがったか？

「どうするんだい？」

「…………。悪いが俺は自分の気持ちを抑えられそうにはなさそうだ」

「それは僕もだ。こんなに怒りを感じたのは久しぶりだよ」

『むむ、リリーも怒ってます』

ああ、二人とも怒ってるだろうよ。だけどさ、

「悪いけど、ちょっと店任せて良いか？」

今回は俺ひとりで行かせて貰うぞ？

ココロ

此処に来るのも久しぶりだな…。

俺はかつて通った学校、赤羽学院へと来ていた。時間はまだ放課後。残っている生徒もいるだろう。そして、奴も…。

目的など初はなから決まっている。

「幼なじみを傷つけたツケは払って貰うぞ…!!」

今の俺の顔は般若のようになっているのだろうか？だが、それでも構わない。今の俺にとって問題なのは、

美保が泣いた、ただそれだけだ。

学校に残っていた生徒に頭木の居場所を聞くと、どうやらこの前新たに建てられたボクシング場にいるらしかった。それと頭木はボクシング部員らしい。

こちとらただの元高校生。勝率を考えれば確実に奴に軍配が上がるだろう。それでも俺には関係ない。

ボクシング場へと向かう俺の中では既に心の奔流は決壊しそうな勢いだった。

ボクシング場へ着くと、中から男女の仲の良さそうな声が聞こえてきた。ハッ！！傷つけた奴はほっというて他の奴といちゃいちゃで

すか？ ぶつ殺す。

ボタンー！！

扉を勢いよく開けると、ちょうど男子生徒が女子生徒の制服に手をかけようとしていたところだった。俺は冷めた視線で二人に送る。女子生徒の方はワタワタと慌てると、俺の横を通り過ぎて外へと出て行った。

「おいおい、お前はどこの無礼者だこの野郎？」

座っていたソファから立ち上がり、苛立ちを含ませた声を俺にぶつける。

「俺からすればてめえの方がよっぽど無礼者だけどな」

吐き捨てるように言い、袖をまくってネクタイを外す。

「んだお前？ 俺に喧嘩売ってんのか？」

「ああ、そうだ。てめえは俺の幼なじみを傷つけた。それだけで喧嘩するにや充分だ」

もはや抑えきることの出来ない怒気が体中からにじみ出る。相手はそんな俺をハツと鼻で笑うと、制服を脱ぎ捨てちよいちよいと挑発した。俺如きにや余裕って事ですかい？

「その吠え面に蹴りぶち込んでやるよ」

右の拳を握りしめ、俺は頭木へとそれを殴りつけた。

同時刻、ケーキ屋

『裕太大丈夫かなあ？』

「さあてどうだろうねえ。僕にはちょっと分からないかな」

心配そうに言うリリーに、言葉を濁しながら笑う晋。その様子が薄情だとも感じたのか、リリーは口をとがらせて晋の鼻先を指で突いた。もっとも、それもすぐに晋の手によって阻まれてしまったが。

『晋ってば薄情なんじゃない？ リリーは頭木が美保にしたこと怒ってるよ！！ 美保は大切な人だもん！！』

「そうだね、それは僕だって同じだ。こんな何でもない顔しててもつつい卵を握りつぶしてしまいそうなほどにね」

心なしか、彼の手の中に握られている卵はミシミシと音を立て、今にも割れそうである。晋だって大切な友人を傷つけられて怒らないはずがない。それでもこうやって怒りを抑えているのは、それはまた別の目的からだった。

「僕が言っちゃいけないんだよ。あくまで僕はサポート。裕太にはそれに気付いて貰わないとね」

『……………？リリー分かんないよお？』

「とりあえず僕らに出来るのはいつもの通りこの店を開けて、裕太の帰りを待つことぐらいだね」

『よく分かんないけど、リリーはケーキを作れば良いのね！』

そうだよ、とニコニコ笑うと晋は再びケーキを作る作業に没頭し始めた。リリーもまたそれに従ってケーキ作りの手伝いを始める。

午後の開店時間はそろそろ近い。

晋はふと真剣な目付きになり、今怒りに燃えているであろう弟の無事を願ったのだった。

日は暮れ、夕方過ぎ。

もう既に閉店しているだろうと思っていた自分の店がまだ空いており、しかも全身傷だらけで帰ってきた俺を迎え入れたのに少しだけ驚いた。とつくに奥で休んでると思ってたのにな。

『裕太おかえりー!!』

「おかえり、裕太」

「ただいま、リリー、馬鹿兄貴」

二人して熱烈な歓迎で俺を迎えてくれる。

俺はそれを気恥ずかしく思いながらも、嬉しい気持ちでそれを受け入れた。

『それで、どうだった裕太?』

笑っていたリリーの顔が強ばり、馬鹿兄貴の顔も少しだけ緊張していたように見えた。

「……………どうにもできなかった」

その途端、店の雰囲気が一気に重くなった気がした。リリーも馬鹿兄貴もどうしていいか分からないらしい。

結果から言ってしまうえば、俺は負けてしまった。相手はボクシン

グを現役でしていて、しかも俺は何もやっていないのだからそれも仕方ない。負けるのは当たり前前のことであり、勝つ事自体がないのだ。

それでも俺は奴に一発報いることが出来た。俺が全身ボロボロになって倒れていた時、油断して近づいてきた頭木の顔にあらん限りの力を込めて蹴り飛ばしてやった。奴はその後怒って半狂乱になりながら更に攻撃を加えてきて、俺は為す術なくそれに耐えることが無かった。

しかし、生徒の誰かが警察にでも通報したのかボクシング場に入ってきた教員達が俺と頭木を押さえ込み、双方引き離された。その後、俺と頭木は処分を受けることになった。

俺に対する処分は、もう高校には近づかないこと。

頭木に対する処分は、しばらくの謹慎処分と監視をつけることだった。

これらを説明した後の兄貴達の顔は筆舌しがたかった。

俺の怒りはまだ収まらなかったが、仕方がない。今回のことは頭木も悪いが、感情に振り回された俺も悪いのだから。

「それで、裕太はどうするんだい？」

「んなもの気まってるんだろ。高校には近づかないし、今までの生活とは何の変わり映えもないさ」

そう、また元の日常に戻るだけさ。

俺は兄貴達に疲れたから寝るとだけ告げて自室のベッドに潜り込んだ。ああ、眠い。泥のように深い深い眠りに俺はついた。

一週間後。

俺は信じられないものを見ることになった。

あれ、おかしいな。俺の目がおかしくなったり病気になったりしていなければ余計なモノがある気がするんだが……。

今日は平日。普通なら授業がある日だ。だと言つのに……、

「いらつしやいませ」

メイド服を身につけた美保がいるのは何故か？

あれ明らかにおかしいよな？ 服のチョイスもそうだが、あいつ今日学校のはずだよな？

「おい、くそ兄貴。そこにいるんだろ？ ありやどついうことか説明して貰おうか？」

「おや、もうばれたのかい？」

柱の影からいつもと変わらない微笑を浮かべてすつと現れるくそ兄貴。いつもより20%増しで嬉しそうに見えるのは何故だろう？

「てめえ以外に誰があんな事を美保にやらせる奴がいるんだよ？」

「おやおや？ 彼女は進んでやってくれたよ？ 僕は何をするかの方向性を示したにすぎないさ」

また言葉巧みにノせたんだろうが。ウチにやこれ以上従業員を養うほど金はないぞ。

「大丈夫、大丈夫。なんとかなるさ」

適当に言葉をはぐらかして女子高校生の座るテーブルに近寄っていく兄貴。女子高校生達はキヤーキヤー言いながら喜んでる。……

…ふう、役に立たない兄貴だ。

美保の方はと言うと、比較的楽しそうに見える。あのことよってできた傷はいやされてはいないだろうけど、それでも今が楽しそうに見えるのはいいことに思えた。

「裕太、ケーキの追加よ。ショートケーキ2つね」

おいこら、美保。なに勝手にバイトしてるんだ。俺はお前を雇った覚えはないぞ？

「細かいこと気にしていると禿げるぞう？」

「原因はお前だろ」

てへつと舌を出して笑う美保。それを見てやれやれと呆れのため息を吐いた。あーあ、なんか気にしてる俺の方が馬鹿らしくなってきたな。

今、美保が楽しんでいるのなら今はそれで良いじゃないか。わざわざ傷をほじくり返してまで思い出させる事じゃない。もしも、彼女がまた思い出したならその時はみんなで全力でケアしてやりやいだけさ。

「ねえ、裕太？ 今日新作のケーキ売るって晋さんから聞いたんだけど？」

「ああ、今日から販売だ。リリーのお墨付きの奴だからメインに入れるつもりだ」

「ねえ、どんなの作ったか教えてよ」

「ん？ 知りたいのか？」

なら教えてやるよ。

「何処かの誰かさんみたいに、無邪気に輝いてるようなそんなケ
キだよ」

ココロ（後書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

話が早いとおもった人……、書いてたらこうなりました。すみません。

ひとまず、『妖精のケーキ屋さん』はこれで終わりです。最後までお読みになってくださった方々、本当にありがとうございます。またお会いすることがあればお会いしましょう。ではノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2276w/>

妖精のケーキ屋さん

2011年10月28日07時06分発行